

20072

光センサー式 IABP バルーンカテーテル 7Fr TRANS-RAY の使用経験

¹名古屋掖済会病院、²名古屋掖済会病院

中井 浩司¹、高橋 幸子¹、宮本 浩三¹、土井 厚¹、花隈 淳¹、森下 雄亮¹、澤田 知広¹、尾辻 眞矢¹、森谷 尚志¹、平手 裕市²

【目的】2012年4月1日付で保険適応され、先端に光センサーを有した IAB バルーン（以下 IAB）の臨床使用の経験から、その有用性と問題点を報告する。

【対象】循環器内科治療中8名、心臓外科手術中5名

【使用機器】IABP 装置:CS300、IAB:7Fr TRANS-RAY いずれも MAQUET 社製

【結果】1. 光センサーによる動脈圧波形は鮮明でなまりがなく、dicrotic notch をより見つけやすい。2. 迅速な導入が可能で、automatic in vivo calibration により動脈圧を瞬時にモニタリングできる。3. ノイズによるタイミング不良の影響を受けにくく、駆動が終始安定した。4. 橈骨動脈でタイミング調整した場合、光センサー式 IAB でそのタイミングをより中枢側で観察すると、インフレーションのタイミング遅延が明らかであった。5. 冠動脈口に留置したガイディングカテーテル先端圧と同 IAB 先端圧の同時記録から両者の圧波形の相似性が極めて高いことが確認できた。6. 7Fr 細径化は、trackability, pushability が低下するため IAB 先端より必ずガイドワイヤーを先行させて挿入しないとカテーテルキンクの危険性があった。7. 透視下視認性がやや劣るため挿入時は注意を要する。

【考察及び結語】臨床では心臓により近い中枢側で情報を得て、心拍動のタイミングに IAB がいかに遅延なく同期するかが重要である。光センサー式 IAB は心臓に最も近い場所にセンサーを有し、ノイズの影響を受けにくく波形が鮮明なため、より心拍動に同期したタイミング調整が可能である。